
俺の弟がこんなに鬼畜だなんて……

雨舞

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の弟がこんなに鬼畜だなんて……

【Zコード】

Z2833V

【作者名】

雨舞

【あらすじ】

ある日の深夜、突然高野歩は弟、桐耶から相談と称してのカミングアウトをされた。

その内容は、彼が腐男子、つまりBLをこよなく愛し男が2人いればそちらに考えてしまう趣味を持つていてる男だと言われたのである。突然のこと驚き戸惑うが、自他共に認めるグラコンの歩は桐耶の口上に騙され、彼の奴隸になってしまふ。

それによって、歩の友人などを巻き込んで繰り広げられていく学園モノ、なはず……

「兄ちゃん……ちょっと俺、相談したいことがあるんだけど、いい?」

深夜、俺の部屋を訪ねた弟がそう言ったのはいつだっただろう。
そう、それはホンの2週間前のことだった。

「はあー。やつと終わつたぜ……オワツー！」

「これで歩と遊べるな。期末期末うつるさかつたからお前」

「は、離せよ、おー。ウツ……息が詰まる……ホントにマジヤバイ
から今の状況！」

俺「高野歩」は悲しいかな、デカイ体すたいにも関らず、俺より頭一つ分
小さい友人A「荒坂浩介」に抱きつかれ勢い余つて首を絞められる
形になり涙目になつっていた。
殺されてはたまらない　いやいや、しないでしょ（笑、と思う人
もいるかもしれないが、コイツはするぞ　と懇願すると、渋々な

がらも離してくれた。

し、渋々だと？お前、俺を本気で殺すつもりだったのかー？
心の中で叫ぶが伝わるはずがない。

この時、浩介は『あのまま、俺があゆむを殺してたら俺だけのモノになつてたのになあー』と、下唇を噛みながら恐ろしいことに本気で悔しがつていた。

恐ろしい奴だぜ、まつたく……

そう思いながら、はや10余年。小学校のとき いや幼稚園のとき
だつたか？ に浩介に懐かれて以来、ずっと一緒にいる。もは
や、腐れ縁としか言いよつがない。それを言つたび、浩介は『赤い
糸だよ』と意味不明なことを言つが。

「なあなあ。いつ遊ぶ？俺、26日から合宿があるんだけど……」

早速、浩介は遊ぶ日程を決めに入つてきた。

26日からか……

確か俺は27日から3日まで合宿があるな。今日は27、今日から
春休みだ。合宿あけてからの方が良さそうだな……

「浩介、何日まで合宿？確か7日から学校だよな」

「うーん？多分3日まで。じゃあ、5日に遊ぼうよーーーね？
5日……予定を洗つていいくと、多分何も入つて、ない。

「おー。じゃあ4日の5日金曜日で。」

確かめるように浩介の方を向くと、ニカッと笑い「歩の家歩の家に行くからなー」と元気イッパイに答えてくれた。

今日クラスであつた事や面白かったこと等、世間話をしていたらあつという間に別れるところが来た。

「ここを左に曲がれば、俺の家。まつすぐ行けば、浩介の家だ。

それじゃあ、と手を振り左へ行こうとするが、浩介が後ろから言つてきた。

「あ、合宿の前にお前んち行くからー突然訪問するけどよろしく頼むぞ～つじやあな」

それだけを言い、まつすぐ走り去つて行つた。

おいおい……俺はいつも家にいなくちゃいけないって事か？

嘆息はしたもの、いつもの事なのでそのまま帰路に着いた。

「ただいま～……」

歩の体には少し狭い玄関で一応シーンと静まりかえり人がいるかも分からぬ家に向かつて声をかけた。

。

誰もいない……のか？

いや、しかし。俺が愛して止まない弟がいるはずだ。

やはり歩が通るには少し狭い廊下を通り歩の部屋に向かう。

こんな時間まで　といつても、まだ6時だが　歩が家にいないことはまずない。

ドスドスと階段を駆け上り、俺の部屋よりも奥にある弟　高野桐
耶　の部屋のドアを乱暴に開けた。

桐耶は彼が自費で買つたというハイスペックのPCの前に座り、ヘ

ツドフォンをかけなにやらしていた。

こちらからは、桐耶の背中しか見えないが。

おーいにおい……癒されるなー桐耶ツて感じ。ここなら何時間いてもいい。

「桐耶～？なにしてるんだ？」

。 。 。

答えてくれたつていいじゃないか……

つていうか、本当に桐耶は後姿もカッコいいなあー見て！あのうなじ……白い肌にかかる産毛。一度も染めた事のない漆黒のつやのある髪。制服の上からも分かる鍛えられた筋肉。引き締まつた臀部。

そんな事を彼の体を眺めながら考えてたら、いきなり桐耶が振り向いた。

オワツ……！

ぎょっとして、持っていた学校していのカバンを思わず抱きしめてしまった。

。 。 。

えつ、ちょっと何か言つてくれないんですか……
俺の姿を凝視される。

ウン？俺なんかした？しましたか？桐耶くん。何もしてないはず……あ、この前桐耶くんが買つてきたプリン、しつそり食べちゃつたよ……それかなあ？

「兄さん、プリンじゃないから……勝手に俺で変な妄想しないでくださいね」

「え、何で分かつたんだ？え、エスパー？？」

「エスパーでもないから……あと、俺の部屋に勝手に入らない。」
スタスタと歩きながら言つてきて、俺は追い出されるように部屋の

外に締め出されてた。

締め出される瞬間さつきまで桐耶がつづいていたPCが田に入ったが、もう閉じられていて何をしていたか分からなかつた。

クソ、開いておいてくれたつていいじゃないか。お兄ちゃんにぐらいサービスしろ……

「桐耶、今度からタダイマつて言つたらけやんと返事くらいしろよな」

悔し紛れにそういうと、再びドアが開いた。

「オカエリ^ ^」

二口つと笑つた顔に『黙れ』と書いてあるのが見えた。

ハツ。もしかして女の子のエロイ動画とか見てたのか？俺が途中で中断しちやつた？

ウワ……何てことしたんだ。

男同士ならではの連帯感がここで勝手に發揮された。

可愛いなあーウチの弟は……

歩には、途中で中断されイラついているよつて見えたのである。知らぬ間に同情されている桐耶だった。

真実は近いようであつたく違つていたが。

その真実のカミングアウトを相談と称して今夜されるとは知る由もなかつた。

2 (前書き)

実際の団体・企業・人名・商品にはなんら関係ありません
フィクションです。

「はあ～……やつぱり駄目だ。」

溜息と共に胸中からベットの上に落ちた。バンザイという形になつた手に持たれているのは、昨今の中学生・高校生は大体持つているであろうゲーム機器、PSPだ。

すでに時刻は深夜1時。

歩はもう4・5時間はぶつ通しでゲームをしていた。内容は、恋愛シミュレーションゲーム『×××』。浩介に貸してもらつていた物だった。

何でも、元は浩介の姉の持ち物らしい。それを姉に勧められやつてみたら面白かつたので俺にも、という事になつたらしい。すでに姉から貰いつけ完全に浩介の持ち物との事。

貸してもらつたは良いが、このゲームは浩介が借りる際に言つていたのをそのまま言つと『B級ゲーム』というモノだった。

つまり、男同士の恋愛シミュレーションゲームだったのである。そんなものがあるなんて、と聞かされた瞬間は単純にビックリしてしまつた。

何事も経験！と、その後借りる口を伝えたら、浩介は顔がだらしくなくなつていたな……

いつもはカッコいいんだが、正直キモかつたな。あの顔は……
やつてみたさーやつてみた。

恋愛シミュレーションゲームだから簡単なのかと思っちゃう、といつ
がドツコイー難しい……

バットエンドに進んでしまい、なかなかハッピーなエンディングまで行かないものである。

もつ、仲間が哀しむ所なんて見たくないんだよ……幸せでいてくれ
よな。

ゲームにまで真剣にやってしまつのは歩の欠点、とも言えるだろ？
そんなところに惹かれる人も多いのだが……

俺は男性向け女性向け関らず、一回も恋愛シミュレーションゲーム
なる物をやつたことがなかつた。予想外にソレは精神的ダメージが
あるモノだつたのだ。

その上、俺はゲームなんて大の苦手……恋愛なんてリアルでもした
ことがない。告白したこともないし、告白されたこともない。

そんな俺が恋愛シミュレーションゲームなんて出来るのだろうか。
諦めてしまえばそれで終わりだが、彼（＝主人公）をなんとしてで
も幸せにしたかった。

「よし、も一回やるか。これで終わりにしよう……」

（1時間後）

「むひや～……無理だろ、こんなの。もう止め止め

PSPをボトツとベッドの上に落とした。両足立膝で肢と肢の間に
手をダランとたらし壁にしなだれかかるよつて背を預ける。
あまりの自分の不甲斐無さにため息が出てくる。

「兄さん、入つていいですか？」

「おおおお」

思考能力が低下していた歩は、『こんな深夜に何事だ、とも思わず生返事で答えた。

入ってきたの『兄さん』と俺を呼んでいた事から分かると思つが、弟の桐耶だ。

「深夜遅くにすいません。まだ明かりがついたので……実は兄さんに相談したいことがあるんです。」

「え？ お前が、俺に？ いや、嬉しいけど。」

「こんな時間にしか相談できなくて……」

頭もよくて何でも出来る愛しいわが弟が俺なんかに相談したいことがあるなんて信じられなかつた。嬉しさと驚きが頭の中に雜居していた。

しかも、よくよく考えれば言つていた様に今は夜もよく深けた深夜なのだ。そんな時間に相談しなければいけない事とは何なのだろうか？

さつきまでは驚きで桐耶の表情など注意して見ていなかつたが、よく見ると彼の顔には笑みが浮かんでいた。少女マンガなら背景に花が咲くだろうと言つほど笑みが。

自身が相談をしに来ているのにその笑みは何なのだ。

しかし、いくら考えてもエスパーでもないのに答えが出るわけがない。

「で、相談つて？ 俺に出来ることなら何でもするよ」

「何でも、してくれるんですか？ 本当に？」

先にも書いたとおり、歩は思考力が著しく低下していた。だから、桐耶の危険な笑みに気づけるはずもなかつた。

歩の言葉を再びなぞり確認していく桐耶に何の警戒心も不思議も抱かず、「本当だよ。桐耶のためなら何でもしてやる」と返事をしてしまつたのだった。

その言葉で、彼の高校生活を一変してしまうことも知らずに。

高校生活だけでなく、人生すら変えてしまつたのかも知れない。

2 (後書き)

遅くなつてすいません

3 (前書き)

お待たせいたしました^ ^
リアルにて忙しかったです
....

「兄さんに……いや兄さんは僕の理想のウケキャラなんですね……！」

いや、桐耶のことだから何か高尚な目的があつて、あんなことを言

歩は残念なことに『腐男子』といふ言葉を知らなかつた

まさか、ウケつて……あの受け????? 桐耶、俺をそんな風に見てたのか！

受けつて、確か貸してもらつたゲームに出てきたよつた。
確か主人公が『受け受け言うな！！！俺は女じやないんだぞ！－！－』
つて言つてたよう気がする。

……待てよ？

ウケ 謂け 漢け 受け

つたに違いない！
そ、そうだ。

そうに決まつてゐる。

「あ、はい！」

そうだよな。

実の弟を疑つちゃあ人間として終わつてゐるよな。

愛しい弟が頼みごとしてるんだ。
兄としては、
協力してあげなきゃ駄目だよな。

「あ、浩介。お菓子あるよ。いる?」

中に入るよう促しながら、聞く。

すると、すぐに明るい声が聞こえてきて、さつきまで沈んでいた気持ちはいつたん浮上したが、小声で浩介が聞いた問いで元に戻つて

しまった。

ゲーム、そうだ。ゲームもあつたんだ。
あれだけは絶対ハッピーハンドにいきたい。

「もしかして、歩にはまだ早かったか？」

浩介のつぶやきも脳内で攻略法を懸命に考えてる歩には聞こえていない。

「実はや……バッジハンドにしか行かないんだ……ハッピーハンドにしたくて……手伝つてもらえないかな？」

「く……？」

歩の部屋に付いた瞬間、あまりの衝撃で沈んでいふと思つていた浩介は予想外の頼み事をされた。

予想外の出来事に頭がついていかなかつた浩介は、思わず抜けた返事をしてしまつたのだ。

「駄目か？？？今度、マックで何でも奢つてやるからーーーその他にも、ひとつだけなら何でも言つ事聞いてやるーーー」

「うう……」

「一生のお願い！ーーーこの通りーーー！」

遂には、浩介は土下座までされてしまつて現在上目遣いで可愛く見上げられてしまつていて。

こんなところが理想のウケキャラだと桐耶がこの場にいたら鼻血を垂らし悶えながら叫んでいたことだらう。
所詮、腐男子とはいいくら見目が良くてもそんなものだ。

「いいよ……ちやんと奢れよ。一つなら何でもこいつ事聞くべつった
よな?ちやんと奢れよ」

そして、彼は鬼畜といつも言葉も知らなかつたのである
グッタラック……

3 (後書き)

浩介は爽やかイケメンであると同時に、鬼畜です！－！

4 (前書き)

お待たせしました……

待ってる人がいるのか分からぬですが、 ただの自己満です！！

ww

「ソラキタ

！――――――

突然浩介が狂つたみたいに大声を上げ手を振り上げた。

流石に物事に鈍感な歩でも、「病院行くか?」とネ界の住人から見れば一瞬にして「日本語でお?」と翻訳される言葉を思わず言つてしまつた。

「いや、引くなよ――！俺は歩のためにやつてんだぞ。つか、これ見てみ?」

「まだテンションが納まりきつていない浩介に若干近寄りがたかつたが、言葉に促されゲーム画面を覗き込む。

「…………?」

「ちやんと見なよ――！やばくないか、これ――マジでネ申だよな――！」

「……なに言つてんだ? どじがやばいんだよ、普通の朝の会話じゃないか」

すると、浩介は驚きの形相で歩を見てきた。

？？？？マジで意味がわからない……

『おはよう』ざこます、偶然ですね。貴方は何時もこの時間なのですか?』

フ、フツウのヤンデレ敬語生徒会書記高氏杜尚じやないか。

タカウジモリナオ

「どじが違うんだよ……」

「さては、お前――やつこんでないな? ? ? ! ゲーマーの風上にも置けない奴め――！」

「いや、だから出来なかつたから頼んだんじやん
「すまん……そだつたな」

「スマン、て……いつものお前と全然違つぞ。
今日はなるたけ近づかないようにしようかな……」

「説明しようつ……会話のとこで『おはよのいりぞこます』と『偶然で
すね』との区切りの間の句読点だ。ほら、みてみ。いつもは『。』
で余裕があるが、今回は『、』だ。これが裏ルートに入つたつて証
拠なんだよなあ……」

そんな事しみじみ言われても……つていうか、裏ルートなんて
あつたんだ。正規のやつでも駄目だつたんだから分かるはずないよな

「ビリヤー。今日は誰もいないはずなんだけど」

「ンンンンン……」

4 (後書き) (a)

短いですね
スンマソソ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2833v/>

俺の弟がこんなに鬼畜だなんて……

2011年11月17日21時10分発行